

歐陽修の歌

金 敬 邁

外文出版社

北 京

歐陽修の歌 (上)

金 敬 邁

外 文 出 版 社

北 京

歐陽海の歌 上 電話東京 812局 3604・7948

1966年 初版発行 1967年5月再版 定価 320円

著 者 金 敬 邁

出 版 者 外 文 出 版 社

(北京阜成門外百万莊)

発 行 者 中 国 国 際 書 店

(北京 P. O. Box 399)

编号: (日) 10050-650

10-J-785P

00180

上巻目次

第一章	風雪のなかで	1
一	命名	1
二	飢え死にしても物もらいはしない	13
三	大晦日	22
四	「天兵天将」	35
第二章	陽光のもとで	47
五	変わった	47
六	「早く大きくなれよ、欧陽海！」	67
七	入隊志願	75
八	はばたけ	87
第三章	戦いは呼びかける	101
九	砲声はどこに	101
十	手紙	111
十一	百万の農奴立ちあがる	120

十二	「ここが前線だ」……………	131
第四章	前進の道……………	145
十三	「虎」年生まれ……………	145
十四	「おれにやらせてください！」……………	154
十五	大きな赤い花……………	163
十六	勝手に部署を離れる……………	169
十七	「小さな虎」……………	180
十八	きたえる……………	190
十九	「よく鳴る太鼓にも重いバチがいる」……………	197
第五章	骨硬心紅……………	209
二十	緊急任務……………	209
二十一	帆を張って大海をゆく……………	218
二十二	思いやり……………	227
二十三	入党……………	233
二十四	突撃組組長……………	245
二十五	三回めの手柄……………	254

第一章 風雪のなかで

一 命 名

春陵河は桂陽県を迂回すると、北に向かつてあわただしく流れ、峡谷を縫って、濃い緑をたたえた湘江に注ぎこむ。そのずっと後方に、瘦せた荒地——桂陽山区がぼつんととりのこされている。その東と北には、だんだらの丘陵地帯がつづき、西と南には、雪をつく南嶺山脈がそびえている。岩が多く、砂の層の厚いこの山頂に、十軒ばかりの貧しい民家がかたまっている。その人たちは先祖代々のやせけた土地に汗水を注ぎこんできた。だが、この土地はどこよりも硬く、どこよりも岩が多く、どこよりも働きのない土地だった。……人

びとはさげすむように、この貧しい山村を「老鴉窩」と呼んでいた。

一九四〇年の旧暦十月二十三日、どんよりとした空が山頂に重くのしかかっていた。平地では冬が始まったばかりなのに、ここ老鴉窩には早くも骨を刺すような寒さが襲っていた。西北から流れてくる灰色の雲が山の頂にまつわりついて離れない。厚い雲の層が山の背に沿ってゆっくりと下りてきて、山区を深い霧のなかにすっぽりと包みこんでいる。数羽の鴉がバタバタとはばたきながら、凄惨な鳴き声を残してあわただしく巢に帰ってゆく。灯ともしころ、雪が舞いながら、音もなく老鴉窩の上に降りだした。大雪が屋根を白く染め、畦道を埋め、山道をかき消した。白一色におおわれた老鴉窩は、ヒュー、ヒューとうなる北風のほか、物音ひとつしない。人びとはわが家のいろりのまわりにうずくまって居眠りをしている——来る冬も、来る冬もこうして過ごすのだ！

村の北のはずれの、石と土の塊りで積みあげられた小屋の前で、顔を出したばかりの小さな松の苗が、北風にもてあそばれて右に左に揺れている。指ほどの太さの幹

が吹雪にもまれている。おそろくまともに育ちはしないだろう。家のなかでは、すすでまっ黒になった土壁のくぼみに、薄暗い桐油ランプがかかつており、黄色い炎が力なくゆれている。寢床からときおりかすかな呻き声もれてくる。お産が迫った欧陽恒文^{オウヤウヘンツン}の女房の声だ。雪まじりの北風が壁の隙間から、かやぶきの屋根の隙間から吹きこんでくる。寢床の上にも、継ぎはぎだらけの蚊帳の上にも、うっすらと雪が積もり、冷え冷えとした空気をただよわせている。この家のあるじ四十がらみの欧陽恒文は、いろいろのそばにはおけたように坐っている。重い筋肉労働と背負いきれない生活の重荷が、かれの背をくの字に押し曲げ、憂いに沈んだ顔に深い皺を刻みこんでいる。かれはいろいろに柴をくべると、呻き声をあげている女房の方を振り返った。そして、胸のなかで、なん度くりかえしたかしない同じことに思い悩んだ。

「……食いぶちがまた一人ふえるわい！ 三分の田と一ムー八分（一ムーは六・六六七アール、十分で一ムー——訳注）の畑で、どうして五人の家族を養ってゆけるのだ……来年はどうやって暮らしてゆくのだ。今年のこの冬をどうして過ごしてゆくのだ！ お天道さまは目が

見えねえのか。よりによって、今年はこんなに早く冬が来やがって……」

「お父つつあん！ あたし、隣へいって杓おばさんと呼んでくるよ」

二番目の娘の玉英^{タメイ}が、ぼんやりと坐っているお父つつあんに声をかけると、返事も待たずに戸をあけて駆けていった。戸口からサーッと風が吹きこんできた。壁の小さな灯火が消えて、部屋のなかがまっ暗になった。

欧陽恒文はいろいろの火で松の枝を燃やして、ランプに近づいた。

「油がもつたないから、ともさなくてもいいよ！ 今日はまだ生まれやしないから」

女房が寢床からつぶやいた。

「こればっちの油を節約したところで、冬が過ごせるわけではねえ！」欧陽恒文はいいながら、やはりランプに火をつけた。かれはいらだたしそうに窓の外に目をやった。「嵩坊^{スオウ}も出ていってから、こんなになっっているだで、もう帰ってきそうなものだ。少しでも口にするものを借りてきてくれたら、おまえに産褥のあいだぐらいはなんとか食わせてやれるだろう……やれやれ、はたち

にもなるのに物事一つにどうしてこんなに手間どるのか」

「いくら駆けまわってもむだだよ。貧乏人の親戚ばかりなのに、おまえさん、どこへ借りにやらせたんだよ！悪いことは重なるもので、今年は、さつまいもも枯れて、なにもとれやしないし、おまけにこの雪じゃ、野草も……」

戸がバタンと開いて、玉英が杏おばさんを連れて入ってきた。杏おばさんは寢床の前で、蠟のように青ざめたかの女の顔をのぞきこむと、振り向きざま欧陽恒文にいった。

「陣痛が始まっているのに、湯も沸かさんで！男はさつさと出ていった、出ていった」

欧陽恒文は軒の下に出て、なかからmelerる女房の呻き声を聞いていた。雪はますます降りしきり、またたくまに欧陽恒文の服のひだを埋めた。かれは戸口に棒のように立ちすくんだまま、あれこれと思い悩んだ。子供を育て、家族を養うにも、この貧乏じゃ、金の貸し手もありやしねえ。なにを食って腹を満たし、なにを食って冬を過ごせというだ！……かれは節くれだった大きな手を

胸に組んで、じつともの思いにふけた。「先祖代々この山のなかでどうにかこうにか暮らしてきたというに、まさかこのおれの代になって……いいや、わしは別に金も銀も欲しいというのじゃねえ。せめて来年もうちつとばかり雨が降ってくれさえすりゃあ文句はねえだ。そうすりゃあ、おれと嵩坊の二人よって、もつと汗水を流し、もつと精を出して働いてやるだ。土地のねえ貧乏人にとつちや、この力だけがかけがえのねえ食い代で……」村の入口のほうからせわしげな足音とともに、手ぶらの嵩が息せき切って駆けてきた。

「お父つつあん、おれ、当たっちゃったよ！」

嵩は駆けつけてくるなり、いきなりいった。

「なにに当たったんだ？」

「くじに当たったんだよ！」

「くじ！……な、なんのくじだ？」

「兵隊のくじだよ！」

「ええッ！」欧陽恒文はぎょつとして、思わず嵩をつかんだ。

「昼に、潘保長が村役場で大勢いる前でくじ箱をあけたんだ。はじめは劉大斗の二番目の息子が当たったとい

っていたくせに、劉大斗の使いがなにやら書きつけを持ってきたら、潘のやつ、とたんにいいかえて、こんどはおれが『上の上』に当たって、上から三人目に入っているというんだ」

歐陽恒文はいきなり殴りつけられたように、足もとがふらついた。この嵩坊が奪われたら、たとえ来年が実りの年だったとしても、誰が畑仕事をしてくれるのだ？ 一家食い上げと同じじゃねえか！

「だ、だけれど、『一人息子は兵隊にとらん』というきまりじゃねえか？ いくら保長だって、お上のきめた法律を勝手に変えられるもんじゃねえ！」お父つつあんは口ごもりながらいった。「お……おまえはやつらに文句をいわなかったのか！」

「法律どころじゃねえよ！ これは潘保長が劉大斗と仕組んだわるだくみなんだ。やつは劉大斗から袖の下をとって、無理矢理おれを劉家の二番目の息子の身代りにしやがったんだ」

「こわくはねえ、嵩坊、こわくはねえだぞ！ 『一人息子は兵隊にとらん』ちゅうのは、お上がきめた法律だで、潘保長がそんな勝手なまねをしやがるなら、わし

や、あいつを訴えてやる！」お父つつあんは自分を勇気づけながらいった。「……区にでも、県政府にでも訴えにいってやる。わしはあんなやつをこわがりやせんぞ！」

「お父つつあん！」嵩はいらいらして地団駄踏んだ。

「潘保長がいうには、おまえのおっ母さんはもうじき子供を生むで、もし男の子が生まれたら、もうおまえは『一人息子』じゃねえで、規定どおり『二人息子』のうち一人をとる』というだよ！」

「なんだと？ 男の子が生まれたら、『二人のうち一人をとる』だと……」

歐陽恒文は、天も地もいっしょにぐらぐらと揺れだすかと思われた。正面から降りかかる粉雪が鋭い刃物のように冷たかった。かれはぶるつと身震いした。心臓がこおりついたようだった。

「二人のうち一人……二人のうち一人か……」

薄暗い夜空を仰ぎながら、そうつぶやいた。

「おぎやあ——おぎやあ——」家のなかで赤ん坊の泣き声がした。よくひびく大きな声だった。

「ああ……」二人はこの思いがけない声にぎくっ

とし、われを忘れたように雪の中に立ちすくんだ。

玉英がとびだしてきて、うれしそうに叫んだ。

「お父つつあん！ おっ母さんが生んだよ、弟、弟だよ！」

杏おばさんも戸の隙間から首をのぞかせて、

「めでたいことじゃ、男の子が生まれただよ！ 『男

の子二人はお家繁昌のもと』というだ。さ、さ、はよう見にきな」

「あなたには面倒かけるなあ！」

欧陽恒文は杏おばさんにちよつと笑い顔をつくつてみせたが、すぐくると背を向けた。かれは胸の襟をかきむしって絶望したように叫んだ。

「人殺しのお天道さまめ！ 『二人のうち一人』か……」

かれは足をあげようと思つたが、一步も進まなかつた。足もとの大地が裂け、その裂け目のなかに自分が落ちこんでゆくような気がした。目の前はまっ暗でなにも見えなかつた。耳にはヒュー、ヒューと吹きすさぶ風の音しか聞こえなかつた。深い深い底なしの淵に落ちこんでゆく……かれはそう感じた。

「おぎゃあ——おぎゃあ——」

生まれたばかりの赤ん坊が薄暗い掘立て小屋のなかで、力強く泣き叫んでいる。この間違つて生まれおちた子、この子は、厳寒と飢餓と苦難を背負つて人の世にやつてきた。

もう夜更けだった。

家のなかにはひっそりと静まりかえつていた。いろりを囲んで、たがいに顔を見あわすばかりで、誰も声をださない。赤ん坊は母親の懷で安らかに眠っている。

風はなおも吹き、雪が小やみなく降りつづけている……

「あーあ！」寢床にいる母親が長い吐息をもらした。かの女は涙のあふれる目で胸に抱いた赤ん坊を眺めながら、あれこれと考えつづけた。かの女はかぶりを振るとあきらめきつたように、

「もういい考えが浮かぶはずはねえだよ。どこかこの子を養ってくれるけつこうな家があったら、いまのうちにあげてしまおうよ。その方が……」

その話をお父つつあんは途中でさえぎつた。

「国民党がのさばり、日本の鬼が攻めてき、おまけ

に劉大斗や潘保長がやいのやいのと年貢をとりたて、人を兵隊に引っぱってゆく、こんな動乱の時節に、食いぶちをもう一人ふやそうなんてお人好しがどこにいるだ！」

「そんなら……」母親はむせび泣きながら、「そんなら、夜の明けんうちに、鎮守さまのほこらのそばに捨てゝるよりほかないだよ。……赤ちゃんや、おまえが少しでも長生きしてくれたら、きつと親切な人が拾ってくれるだよ……」

「おっ母さん！」玉英が母親の寢床に泣きふした。「捨てないで！……捨てゝるのだったら、あ、あたしを売ってよ……」

「玉英や！」母親は玉英の頭をなでた。「おまえを売ったところで、やつぱり『二人のうち一人』はとられるんだよ！しかたがねえだよ……お父つつあんやおっ母さんのせいじゃねえだよ、もう……もう、おっ母さんはこの子を生まなかつたものとあきらめるよ……」

「おっ母さん！」嵩がふさぎきつた声で叫んだ。「兵隊にとられるなら、とられたってかまわねえ。たとえおれが死んでも、弟だけは……」かれはそう口に出しかけ

たが、ちらつとおっ母さんの顔を見てまたその言葉をひっこめた。

「お父つつあん、もう遅いから、はよう決めなきや！」

おっ母さんがせかせせた。

歐陽恒文はぼんやりとした頭を両手で支えながら、さつきからの話をのこらず聞いていた。しかし、かれにどうして決められよう？鎮守のほこらに捨てれば、夜の明けないうちに凍え死んでしまう。といって、捨てなければ、嵩坊は引っぱられてゆく。一家は誰に頼って生きてゆくのだ？赤ん坊を家においても、飢え死にするだけだ……

みんなは黙ったまま坐っていた。どれくらいたっただろうか？吹きすさぶ北風の音にまじって、鶏の鳴く声が聞こえた。

「お父つつあん、もう夜が明けてしまふよ、連れてゆくなら、はよう連れていかなきゃ！」

お父つつあんは坐ったまま、体を起こそうともしない。おっ母さんは赤ん坊を差しだして、

「嵩坊！さ、おまえ、抱いて……抱いて……抱いて……」

で」

「おれは、いやだ！」

兄はうなだれたまま動かない。

「わしがいく！」お父つつあんは、がばつと立ちあがった。「これ一人のために、みんなが飢え死にするわけにはゆかねえ！」かれはぶるつと身震いすると、つかつかと歩みよって女房の手から赤ん坊をうけとった。そして、そつとランプのそばにゆき、涙でうるんだ目を細めて、生まれたばかりの赤ん坊をしげしげと眺めた。赤々とした顔、黒い髪の毛、目はあいてない。

「くそっ！……」かれは歯を食いしばって、表へ出ようとした。

「お父つつあん……」嵩と玉英がうしろからぐいとお父つつあんの服を引っぱり、ひざまずいて叫んだ。「お父つつあんよ！……」

お父つつあんは二人に逆らわず、そのままつっ立っていた。玉英は寢床のおつ母さんを振り返って、

「おつ母さん！ おつ母さんは見えないの？ 外は雪が降っているだよ！……」

おつ母さんはくると背を向けた。着物の端をぎり

とかみしめ、両手で自分の髪をかきむしった。寢床からかすかなすすり泣きの声もれた。

欧陽恒文の胸に熱いものがぐつとこみあげてきた。両足がずつしりと重かった。この子を抱いて、目の前のこのしきいをどうしてまたぐことができれば！ これからの生活のことを思いおこし、かれは足踏みして、

「放せ、放さんか！」

と怒鳴るとぐいと戸を推した。

冷たい風が雪といっしょにサーッと吹きこんできた。

胸の赤ん坊はおどろいて泣き声をあげた。泣き声は、針金のようにおつ母さんの胸を突いた。

「お父つつあん！ あんた……」

欧陽恒文は足をとめて、髪を振り乱した女房の方を振り返った。

「あんた、待つて……もう少し服を着せておくから！」

おつ母さんはいいながら、急いで縫ぎはぎだらけの綿入れを脱ぎ、深々と赤ん坊をくるんだ。

「おぎゃあ——おぎゃあ——」赤ん坊は休みなく泣きつづけた。おつ母さんは急いで胸をあけ、乳首でその

小さな口をふさいだ。部屋のなかはまだ静けさをとりもどした。おつ母さんは、まばたきもせず、赤ん坊を眺めていた。赤ん坊を抱く手にますます力がこもった。あたかも、この数秒のあいだに、全身の乳と血と愛情を注ぎこもうとするかのように。ふいにかの女は乳首を抜くと、気が狂ったように叫んだ。

「早く、早く連れて行って！」

赤ん坊はいつまでも胸のなかにいてはいけない。あと一秒でもおれば、母と子はもはや別れられなくなる……かの女はそう思った。

欧陽恒文は赤ん坊を抱くと、よろめきながら表に出た。雪が激しくかれの顔を打った。突風がかれのボロ帽子を吹きとばした。が、かれは魂が抜けたかのように、ただ前に向かって歩いた。曲がり角にきたとき、戸口のあの小さな松の木が見えたらなかった。目を凝らして見ると、小さな松の木は大雪に深く埋もれている。わずかに、葉だけが北風に揺られて顔をのぞかせている……

鎮守のはこらは、前の分かれ道のところに白い土饅頭のように立っていた。ほこらの入口は、いまにも父子二人を呑んでしまいそうな黒々とした大きな口をあけてい

た。欧陽恒文はその前までくると、片手を伸ばして供物台の雪を払い落とし、その上に、そおと胸の赤ん坊を下ろすと、身をひるがえして駆けだした。

赤ん坊は、供物台の上に静かに横たわっている。このまま安らかな眠りにつくだろう。そして、おそらく二度と目を醒まさないだろう。

すさまじい犬の遠ばえが雪の夜の静寂を破った。赤ん坊は小さな足をバタバタさせて泣きだした。はつと悪夢から醒めたように、欧陽恒文は足をとめた……

この子は七人目の子だった。先の六人のうち、四人が飢えと寒さで死んでいった。生き残ったのは嵩と玉英の二人だけだった。生きることのできなかった子供たちのために、父と母はどれだけ心を痛め、どれだけ涙を流したことだろう！……いままた、生まれたばかりの男の子を自分の手で吹雪のなかに捨てなければならぬ……

「自業自得だろうか、それとも欧陽家の後継ぎを断とうというお天道さまのおぼしめしなのか？」

かれは鎮守のはこらの方を振りかえった。

「おれはなにをしでかそうとしていたのだ？ ばかたれめ！ おれは、息子を自分の手で雪のなかに生き埋め

にしようとしているのだ！……」

ほこらと雪空をかわるがわる見かえしているうちに、かれは無意識のうちに、赤ん坊の方へ引き返した。

おっ母さんは寢床にうちおれて、表の足音が吹雪のなかに消えてゆくのを聞いていた。胸が刃物で裂かれるように疼いた。自分の大切な宝がもちさられ、自分の肉体の一部がえぐりとられたのだ！ 十ヵ月の懐胎はいいようもなくつらかった。そして、やつとのことで生みおとした男の子が、自分の見ている前で捨てられていった……考えれば考えるほど悔やまれてならなかった。考えれば考えるほど、胸が痛んだ。口のなかがいがらっぽく、あとからあとからこみあげてくる涙が、腹に流れこんでいった。

「ひどい！……ひどい！……これは人殺しだ。『二人息子のうち一人をとる』なんて！」

おっ母さんは大声で泣きじゃくりながら、寢床から転げ落ちるように土間におりて、苦しげに戸口の方へ這っていった……

突然、破れ戸が大風に吹かれたようにボタンと音がして開き、赤ん坊をしっかりと抱いた欧陽恒文がとびこん

できた。

「兵隊にとるならとりやがれ！ 死ぬならみんないっしょに死ぬんだ！ 赤ん坊にはなにも罪はねえ。わしはこの子を捨てられねえ。わしはそんなことはできねえ！」 お父つつあんが赤ん坊を抱いて帰ってきたのを見て、みんなはかえってびっくりし、いう言葉もなかった。土間にひざまずいたおっ母さんは腕を伸ばしてくちびるをわなわたと震わせながら、やつとのことで絞り出すように叫んだ。

「お父つつあん、早く、早くわたしにおくれ！」

かの女はひたたくるように赤ん坊を受けとり、すばやく着物の襟をあげた。そして、しっかりと自分の胸に抱きしめた。

風はなおも吹きつづけていた。雪も小やみなく降りつづけていた……

それから数日が過ぎた。雪がやむと、保長さまが山にやってきた。潘保長があら屋をさしてまっすぐやってくるのを遠くから見た一家のものは、すっかりとりみだしてしまった。欧陽恒文があわてて表へ迎えに出ていっ

た。

「恒文！ おまえの家に男の子が生まれたそうだな。わしはお上の仕事に忙しくて、お祝いにも来れなかった！」

保長はいいながら、ずかずかと家のなかに入りかけた。

「保長さま、わしらみたいな貧乏人の家に子供が生まれるというのは、よくよくの悪運ですだ！ 家のなかは狭くてきたねえで、先生さまにすわっていただくところもねえですだ」

といって、歐陽恒文は身をかめて入口をふさいだ。

「かまわん、かまわん、わしらお上の仕事をしとるものは、そういうことはいっこう気にせん。いまは抗戦の時勢で、『新生活』運動が奨励されているんでなあ。蔣委員長も、通行人は左側を歩くと定められたじゃないか！……」

保長はステッキで恒文を押しつけ、なかに入ろうとした。と、うしろから誰かに手を引っぱられた。

「保長さま！ お産をした女の部屋になんか入れたものじゃないですだ。『新生活』、旧生活といったってな

にも変わったところはねえですだ。あの臭いにおいに当てられた日にゃ、一生けがれますだ！」杏おばさんが満面に笑いを浮かべて、保長を引っぱった。「あなたさまのような先生さまは、功名を大事になさいますだに、もしもあなたさまのご名譽をけがすことになった日にゃ、恒文の家も申しわけが立ちませんだ。お話なら、わたしの家へ来てもらって」

そういうと、押したり引っぱったりしながら、保長を自分の家に案内した。

「恒文！」保長はいきなり切りだした。「おまえのころの嵩が『上の上』のくじに当たってしまつてなあ、わしもおまえのことは同村のよしみだから、一肌脱いでやろうと思つとったんじゃが、なにしろくじ箱は大勢見ている前であけたことだし、運悪くその日は連保主任が見えていたもんで、どうにもならなかったんじゃ。四、五日したら師団管区から迎えに来るそうな」

歐陽恒文は放心したようにぼんやりとつつ立っていた。口をあけたが、言葉にならなかった。

杏おばさんがお茶を運んできて、

「保長さま、『一人息子は兵隊にとらん』ちゅうこと

じゃなかったですかね？」

潘はにやりと笑って、

「そのとおり、『一人息子は兵隊にとらん』ちゅうのは、お上がきめた法律じゃ。ところで、恒文の女房は、このあいだ、また男を生んだそうじゃないか？ それなら『二人息子のうち一人をとる』ということになる。わしもお上の仕事をしている以上、公正にやらねばなるまい！」

「男の子が生まれただって？」杏おばさんはわざと口をゆがめた。「恒文の女房はよくよく前世で悪い種を播いておいたのか、こんども、また福がさずからなかったですだ！」

「なんだと？」

「いーえ、またまた娘っ子が生まれましただ。まったく金かかりですだ」

「ほんとうか？」

保長は湯飲みをおろして立ちあがった。

「あたしがへその緒を切ったで、うそをいうわけはねえですだ！ うそだと思うなら、見てもらったらええですだ」

「杏ばあさん、女がでたらめをいっちゃいかん。『一家が法を犯せば、十家連坐』だぞ！ おまえ、知っていながら政府をだました日にゃ、それこそ倍の罪が科せられるぞ！」

保長はおどした。

「法を犯すなんてとんでもねえ話ですだ。なんなら、抱いてきて見せますだ」

杏おばさんはそういうと、身をひるがえして出ていった。むりに隠したって隠しきれるもんじゃない。いっそ思いきって抱いてきたら、いくら潘のやつでも、見るとまではいいですまい、かの女はそう考えた。

しばらくすると、かの女ははたして恒文の赤ん坊を抱いてきた。

「竜が鳳凰に化けたり、鳳凰が竜に化けるなんてことはありませんだ。だけれども、保長さまもお上の飯を食べていなさる手前、やっぱり自分の目で確かめてもらわにゃお役目がたたんですじゃろ」

いいながら、本当にぼろぼろのおしめをほどきはじめた。

手に汗を握っていた欧陽恒文は、勇気をふるって、

「そうだ、見てもらったらええだ、保長さまも安心なさるで……」

「ありやッ、まあー！」杏おばさんは突然叫び声をあげた。「この死にぞこないのあまめ、また粗相をしただよ！ 体ぢゆうべちよべちよじゃねえかよ……保長さま——」

「するとあいつらが間違つて報告したのかな？……」

保長は考えながら、ちらと横目で見た。赤ん坊は骨と皮ばかりに瘦せ細っている。胸がむかむかしてきて、かれはあわてて手を振った。

「もういい、もういい！」

杏おばさんはあいかわらず笑いながら、

「保長さま、やっぱり一目見ておかれたら？ お上の仕事ですだに！」

「女なら女にちがいなからう。見るまでもない」潘はうしろを向くと、恒文にいつけた。「金のあるものは金を出し、力のあるものは力を出さにかい！ 徴兵は免じてやるが、壮丁税の十石の米は一粒もまけられんからな！ 前線の兵士が米を待つてられるんだからな」

潘保長はステッキを振り振り行つてしまった。欧陽恒文はほつと胸をなでおろした。両手が氷のように冷えきり、額からどつと冷や汗が流れでた。かれは体ぢゆうの骨が抜けたように、へなへなとうずくまった。

「こんなところにうずくまつて、なにするだ？」

「わ……わしは……」

「早いとこ名前をつけて届け出にや」

杏おばさんは赤ん坊を恒文に渡していった。

子供の名前は生まれる前に薬屋の老先生を煩わせてつけてもらつてあつた。長男が「嵩」なので、こんど生まれるのが男なら、一字で「海」という名前にすることにしていた。「高山」が「水」を得れば、日々盛え、みんなの運が開けるといふわけである。

「名前はとつにつけてあるだ。幼名は『三三』、正式の名前は『欧陽海』」

「欧陽海だつて？ 海だ河だなんて名前はいかん！ ごまかすなら、とことんまでごまかさにか。女の子の名前にするがええだ！」

「じゃ……じゃ、どんな名前がええだかな？」

「姉が玉英だで、この子は『玉蓉』じゃどうだね！」